

# Art of Writing

—Kurt Vonnegut の “Tom Edison’s Shaggy Dog” を通して—

## Art of Writing: An Article on Kurt Vonnegut’s “Tom Edison’s Shaggy Dog”

吉岡 亜希

Aki YOSHIOKA

### [1] Vonnegut の世界に飛び込む前に

Kurt Vonnegut は、20 世紀に登場するアメリカの SF 小説家として知られている人物で、彼を一躍有名にした作品は、1969 年に出版された *Slaughterhouse-Five* である。それは、従来の SF 作品、例えば、日本人になじみ深い『鉄腕アトム』が、読者に明るい未来を予感させるのとは対照的に、現実世界に対する何とも言えない不安を読者に抱かせる。ただの SF 作家でない雰囲気を漂わせる Vonnegut の経歴について目を向けてみると、彼をただ夢を与えるためだけの「SF 小説家」と呼ばれるにとどまらせることが、あまりに惜しい事だと分かった。事実、彼には、Cornell 大学で専攻した物理学の知識や、アメリカで最先端の技術を発信する General Electric 社<sup>(1)</sup> で働いた経験、Chicago 大学で専攻した文化人類学の知識があり、それが彼が作中で取り上げる「科学技術」や「人類の幸福」というテーマについての素地となっていたのだ。それゆえ、彼の作品が持つメッセージは、我々読者にとって意味があると思われる。しかし、彼の作品に対する世間一般からの評価は低い。それには、彼の作品のテーマとは別の理由が大きく絡んでいるようなのだ。

Vonnegut の作品は、アメリカの一部の地域で、子供の教育に悪影響を及ぼすとして禁書扱いされ、学校図書館に入れることが、教育委員会などによって禁じられているのである。それは、言論への規制が厳しかった昔の話ではなく、つい最近のことなのである。記憶に新しいものでは、2011 年 7 月 26 日のニュースで、ミズーリ州の教育委員会によって、*Slaughterhouse-Five* (1969) は下品な言葉を含む作品なので、学校のカリキュラムで使用されることや図書館に置くには不適切であるとみなされた。けれども、そういった要素を除けば、この作品は、彼の実体験に基づいた物語であり、それゆえ、戦争が人々に何をもたらすのかについて、子供たちが知る良い機会を与えてくれる重要な作品と考えられる。また、出版当時からも、彼の作品の中で用いられている言葉について議論があったようだが、彼はそれについて反省すると見せかけて、アメリカ合衆国憲法の修正第 1 条に関する冗談を飛ばして議論を退けていた。修正第 1 条とは、言論の自由について言及している箇所なのだが、Vonnegut はそれについて『死よりも悪い運命 (*Fates*

Worse Than Death)』の中で次のように言っている。

わたしにとって、修正案第1条は法令というよりも夢のように思える。どんなことをいってもかまわないし、また出版してもかまわないという権利は、その権利を擁護するとき——そしてその機会が多いのだが——自分が誰かの夢のなかにいるような、実体のない気分させられる。それはとても悲劇的な自由である。刑罰を受けないですむとなれば、一部の人びとが公の場でとくとくと表現する下劣さにはかぎりなくなるからだ。(111)

この文章からは、自分の作品により現実味を持たせるために用いたスラングを、極端にわいせつ文書のそれと一緒にされたくはない、という彼の気持ちが伝わってくる。また、彼は『パーム・サンデー (Palm Sunday)』の中で、「わたしは作品中のアメリカ人に、アメリカ人がほんとうに話す言葉を使わせたいと、本気で望んだ。われわれの肉体について冗談を飛ばしたいとも思った。それがなぜ悪いんだろう？」(333)と、作中の言葉遣いにこだわりがあることを示す。しかし、そのこだわりが、彼の作品に否定的な評価を与えてしまっているのも事実なのだが、彼は、自分の姿勢を崩すことをやめなかった。ここから、なにゆえ Vonnegut が小説家として誰にも譲らない、書き方へのこだわりのスタイルを持っていたのかについて興味を持った私は、Vonnegut の「書くという芸術 ‘Art of Writing’」について焦点をしばって論じることにした。そこで、Vonnegut の考えが特徴的に表れている短編小説 “Tom Edison’s Shaggy Dog” (1953) を読むことにする。

“Tom Edison’s Shaggy Dog” は、定年を過ぎた二人の男が、フロリダのとある公園で会うところから始まる。一人は、Bullard という名前の、過去に多方面のビジネスで成功し、退職後は、この公園で出会う他人に、いつも自分の過去の栄光を聞かせては楽しんでいる男で、犬を連れている。もう一人は、名前が明かされない、公園のベンチで静かに読書をしている男である。Bullard がいつものように、自分の自慢話を聞かせようと、この男に近づく。それを境にして、物語は意外な方向へ進む。

## [2] 文体に込められた仕掛け

この小説からみる Vonnegut の特徴の一つは、読みやすさである。読者はその文章の読みやすさゆえに、すいすいっとページをめくってしまう。“Tom Edison’s Shaggy Dog” の中では、その特徴が次のように表れている。

場面は、Bullard が、公園で出会った男に自慢話を聞かせているところである。

‘Yes,’ said Bullard, rounding out the first hour of his lecture, ‘made and lost fortunes in my time.’

‘So you said,’ said the stranger, whose name Bullard had neglected to ask. ‘Easy, boy. No, no, no, boy,’ he said to the dog, who was growing more aggressive toward his ankles.

‘Oh? Already told you that, did I?’ said Bullard.

‘Twice.’

‘Two in real estate, one in scrap iron, and one in oil and one in trucking.’

‘So you said.’

‘I did? Yes I guess I did.’ Two in real estate, one in scrap iron, one in oil, and one in trucking.’ (128 – 129)

初めに一時間、自慢話をしたところで、Bullard は、「そう、若い頃に何度も財をなしては、失ったんですよ」

「そうおっしゃってましたよ」と、Bullard が名前を聞き忘れた男は返し、自分の足首に積極的にまとわりついてくる犬には「よしなさい。こらこらこら」と言った。

「あれ？私、その話しましたっけ？」と Bullard は言った。

「二回」

「そうそう、あなたのおっしゃる通り、不動産では二度、くず鉄屋、石油、トラック運送業ではそれぞれ一度、成功したんですよ」

「そうおっしゃってましたって」

「言いました？言った気もするなあ。不動産では二度、くず鉄屋、石油、トラック運送業ではそれぞれ一度、成功してね」(筆者試訳)

このような短く読みやすい会話文が作品の大部分を占めており、Vonnegut の作品において、読者が文体によってつまづくということは、まずないだろう。そのおかげで、読者が話の流れについていけるだけでなく、内容に入り込むことさえ可能になる。つまり、この会話文において読者は、Bullard が男の言った‘Twice’の意味を取り違えて、不動産での二度の成功話に男が乗ってくれたと思い、自慢話を得意げに続けるという、漫才のボケとツッコミのようなやりとり気づいて、笑うことができるということである。実はこれこそ、Vonnegut の仕掛けである。批評家である Karl は *American Fiction* (1985) において、こう述べている。

Rapidity is the key to the episodes, as it is the key to the language. Sentences are very brief, the words familiar and conversational. Dialogue is of the rapid-fire type—two or three words back and forth down the page, themselves contained in brief episodes, Woody Allen routines. We are not expected to pause, for if we do, the entire structure fails. If we ask questions, the book is doomed. (345)

速度は、言語の鍵であるように、エピソードの鍵でもある。文章はとても簡潔で、馴染み深い話し言葉である。会話は矢継ぎ早、というのは、短いいくつかのエピソードに含まれている、二、三種類の言葉がそのページを行きつ戻りつし、Woody Allen の常套手段のようである。読者は、物語の途中で立ち止まってはいけない。というのも、もしも読者が立ち止まってしまったら、その全体の構造が崩壊してしまうからである。もし読者が疑問をはさんでしまったら、その作品は台無しになってしまう。(筆者試訳)

この Vonnegut の特徴である「速度」が、物語の鍵となっており、読者は物語に夢中にさせられる。この考えは、Vonnegut の学生時代に生まれたようである。彼は、Cornell 大学時代に学生新聞 *Cornell Daily Sun* (以下 *Sun*) の部員として記事を書いていた。その時、新聞の記事にするためには読みやすい文体で、すぐに内容が見てとれることが大事であると学び、その経験で得たことを小説の作法に生かしているのである。まさに、彼はこのスタイルで、その内容に問いかけさせる余裕を読者に持たせず、自らが意図するテーマに読者を勢いでもって誘導しようとするのである。

しかし、その「速度」を大事にすることは、同時に Vonnegut の作品にデメリットを生じさせているようである。“he has so insufficiently based his routines, technically, ideologically, philosophically, that he comes very close to vulgarization of his material” (Karl, 344). (彼は、技術的にも、イデオロギー的にも、哲学的にも自分の手法の基礎を固めていないので、彼の題材が通俗化の一手手前まで来ている (筆者試訳))。Karl は、Vonnegut の作品が「速度」を重んじるあまり、彼の作品の低俗化を招いてしまっていると指摘している。けれども、この指摘は、作家として高評価をとることと、より多くの読者を得ることのどちらかが Vonnegut にとって大事なことであるかを示す。Vonnegut は、面白くなければ人は読まないから、面白くするという。確かに、作家として、文壇で認められるかどうかは一大事であるが、読者にとってみれば、興味を惹かれるかどうかの問題なのである。とりわけ Vonnegut は、世間を風刺 (satire) する作家であるので、作品の内容が重くなって読者に面白みを感じさせられず、読者に敬遠されてしまうことは、作家として良くないと思っている。Vonnegut は、その点をよく踏まえ、本の将来を見据えて作品を紡ぎ出す。

“Tom Edison’s Shaggy Dog” の方に話を戻すと、Bullard と犬は、いつものように自慢話の餌食になる相手を見つけ、過去のビジネスでの成功体験を語りながら、「今の若者にはパイオニア精神がない。私の若い頃なんて、自分でチャンスをつかみに外へ飛び出したものだ！」と力説していると、彼の犬が執拗に男の足に歯を当てようとするので、Bullard は、“That dog is nuts about plastic. Don’t know why that is, but he’ll sniff it out and find it out if there’s a speck around” (129). (その犬はプラスチックに目がないんだ。なぜそうなのかは知らんが、ちょっとでも周りにプラスチックがあると、そいつをかぎ分けて見つけ出してしまうんだよ (筆者試訳)) といって、話題が犬の嗅覚からプラスチック、プラスチックから男の職業へと移り変わる。すると、その男から返ってきた反応は “I’ve never had a line. I’ve been a drifter since the age of nine, since Edison set up his laboratory next to my home, and showed me the intelligence analyzer” (130). (私は、これまで一度も仕事に就いたことがない。Edison が私の家の隣に研究所を建て、私に知能分析装置を見せて以来、9歳からずっと遊民人生です (筆者試訳)) であった。

ここまでの話から分かることは、この二人が、対極に位置する人物であるということだ。Bullard は、「パイオニア精神」云々を語り、自分のビジネスの成功を誇りに思っている人物で、仕事をする気がない若者を見ては嫌気を起こしている。その一方で、もう一人の男は、仕事についたことのない人物であり、だからといって、無職であることに不自由を感じている様子はない。なぜ、このような正反対の生き方をしてきた二人の人物を、Vonnegut は登場させたのだろうか。この疑問については、ここでは触れず、物語の結末について論じた上で、考えることにする。

### [3] ヒーローがもたらそうとした未来とは？

その男の話によると、Edison は彼の家の隣に住んでいて、近所の人々には魔法使いだと思われていた。近所に住む子供たちは、「Edison の邪魔にならないように、研究所には近づいてはいけないよ」と言われていたので、その当時少年だった男は、隣人である Edison との面識はなかったが、Edison の飼い犬 Sparky とは仲良しであった。男が Sparky と、Edison の研究所のすぐ外でじゃれていたある日、Sparky に押されて彼は研究所の中に入ってしまふ。男は、すぐに出て行こうとしたが、Edison に捕まえられ、研究での苦勞話を聞かされ、その後、開発中の intelligence analyzer を見せられる。この装置についての持論を展開しながら、Edison は、“It will be your generation that will grow up in the glorious new era when people will be as easily graded as oranges” (132)。 (君たちの世代は、まさに、人々がオレンジのように簡単に格付けされる、素晴らしき新しい時代で育っていくのだよ (筆者試訳) ) という。

ここで、Edison が男にさらっと告げた「オレンジのように人々が簡単に格付けされる」ということは、果たして本当に素晴らしいことだろうか。いや、これは、Bullard が主張するような、努力の象徴であるアメリカのパイオニア精神を覆すことであり、「人の努力」が報われない、恐ろしい時代の幕開けを意味するのではないだろうか。何より恐ろしいことは、このセリフを言ったのが Edison であることだ。Edison は、人類に輝かしい未来を予感させた発明家として、広く認知されている人物であるが、彼の発したこの一言は、読者のその固定観念を揺さぶり、「Edison は本当に素晴らしい発明家であるか」という直接的な問いよりも、知られざる Edison の経歴へ、読者の関心を向けさせようとする。まさに、こういった読者の関心を煽る間接的な表現が、Vonnegut の魅力ある皮肉 (irony) なのである。

Vonnegut は、*Sun* で新聞部員として記事を書いているときから、はっきりと問題に対して言及しない代わりに、独特の皮肉を用いていた。第二次世界大戦期には、アメリカ国民に、ドイツや Charles A. Lindbergh<sup>(2)</sup> に対して反感を抱かせる意図を含む、アメリカメディアの批判に対して、Vonnegut は異議を唱えており、Charles A. Lindbergh の記事<sup>(3)</sup> などに、彼の特徴である皮肉がよく表れている。その姿勢は当然批判を受けるが、姿勢を変えようとしなない Vonnegut は、次第に他の部員と袂を分かつことになる。国民の関心を意図的に支配しようとする、アメリカメディアの報道が表なら、そこには存在しない裏を Vonnegut は描きだそうとし、客観的に物事を人々に見せようとしたのである。だからこそ、彼の機知に富んだ皮肉もまた、彼の作品を彩る一つとなっていると考えられる。

男は、intelligence analyzer の話を聞いて、自ら実験台として名乗り出て、intelligence analyzer を頭につけてみると、メーターの針は大きく触れることなく、そのままの位置でかすかに震えるだけであった。その結果に、男は落ち込んでしまい、それを境に、何か努力をしてみようと思うことはなくなり、現在に至るというわけだった。次に、Edison は、Sparky に試してみようと思ひ、逃げようとする Sparky を無理やり捕まえて実験してみると、なんと犬が Edison の知能を超えているという結果が待っていた。この信じられない結果に、Edison は普段の Sparky の様子を思い返して、自分の犬がのんびり気ままに暮らしていたときに、自分は電球を完成させるために日夜、必要な素材探しで研究に明け

暮れていたと思うと、「自分の努力は何だったのだ！」と、努力の無力感に苛立たしさを覚える。

まさに、intelligence analyzer は、この男から「努力」という言葉を奪っただけでなく、発明した張本人である Edison にも、「努力」なんてちっぽけでつまらないものだと思うせてしまうのである。また、測定された人を不幸のどん底に突き落とす、この intelligence analyzer は、メーターの最高値が Edison の知能指数となっていた。これは、Edison が自分にとって都合のよい、自分が一番である世界を構築するために、この装置を開発にしたとも解釈できる。そうはいつでも、Vonnegut は実在した Edison を批判するために、作中に Edison を登場させたのではなく、自己の優越を希求する「一部の人間の欲深さ」をわかりやすく体現させるため、または、それを考えるきっかけとして登場させたのだと、私は考える。

#### [4] 進歩は本当に人々に幸せをもたらすのか

Sparky は、Edison の怒りをなだめるため、そして、Edison が犬の知能について他言しないことを条件に、Edison が探していた実験の素材を教える約束をして、ドアから出て行く。すると、Sparky は、研究所の周りにいた犬達に八つ裂きにされ、死んでしまったと男は話し、読んでいた本を脇に挟んで、その場を去っていった。

Sparky が殺された理由は、Edison に犬の知能が非常に高いと知られてしまったことにより、人間と違って、忙しく働くことを迫られず、のんびりと平安に暮らしてきた犬の生活が脅かされる危険が生まれたからだろう。それは、Sparky が“why not keep quiet about this?” (133) (このことを秘密にしておかないか？ (筆者試訳)) と、Edison に問かけるセリフから見てとれる。それと同時に、このセリフを「このままの生活がどうしてだめなんだ？」とも解釈できそうだ。Jerome Klinkowitz によると、この作品が誕生する以前に、Vonnegut は文化人類学者である Robert Redfield 博士から、民族社会 (folk society) の考えを学んでいたという事実がある。

During the time he was there (1945—1947), the department's leading scholar, Dr. Robert Redfield, was developing his thesis of the folk society, demonstrating how groups of about two hundred people could not only survive self-sufficiently but do so in a pleasing manner, keeping every one happy because there was a job for each member, a way every person could feel that he or she was of use. (21)

彼がシカゴ大学 (1945—1947) に在籍していた当時、文化人類学で一流の学者であった Robert Redfield 博士は、民族社会に関する自分の主張を、次のことを論証しながら、展開した。いかにして、約 200 人から構成される各集団が、自給自足で生き残ることができるばかりでなく、相手を気持ちよくさせる接し方で、共存し、お互いの幸せを維持できるのか。その理由は、そこには自分が属する集団にとって、自分の仕事があり、自分が集団にとって、役に立つ人間であると実感できる方法があるからである。(筆者試訳)

つまり、人間には共同体 (Community) と、その中での役割 (Part) が必要であるというのが、民族社会の考えである。実際に、Vonnegut は Bullard というキャラクターを通して、人間は共同体の中で努力し、他者と切磋琢磨して勝ち取った役割に、誇りを持って生きてきた動物であったことを体現している。だからこそ、科学技術の発達によって、Edison の隣人だった男が役割を持たず、共同体の一員になれなかったことは、科学技術の発達が、人間に不幸をもたらすものであるという意味にとれる。したがって、Sparky が「なぜ人間は、いままでの秩序を壊してまで、自分達の努力が報われないような時代に足を踏み入れたがるの？」と、問いかけているように聞こえるのである。これが、あながち的外れではないという気にさせられるのは、普段はそう語られることのない、Edison の人物像に理由がある。

## [5] Edison とは

ここで、オーエン・ギンガリッチとジーン・アデア著の『エジソン』を元に、Edison の人物像について少し触れてみる。Edison は、幼少のころから、好奇心旺盛な子供であった。そういった彼の性質が彼に数々の発明品を生み出させ、自身を大成させるにつながったことは想像に難くない。しかし、彼の好奇心にはどうも倫理観がないようであった。なぜなら、Edison が6歳のとき、「本人の釈明によると、『ただどうなるか見たくて』、父親の納屋に火をつけたことがある」(13) ことや、自分の遊び仲間と小川で遊んでいたときに、泳ぎが苦手な友達がおぼれているにもかかわらず、助けずに帰り、そのまま死なせてしまったことには、Edison の人間性に対し、多少の疑問を感じさせられるからだ。それらよりも、もっと不安を感じさせられることは、Edison の度が過ぎたいたずらである。

彼は、その当時、電信会社の最大手ウェスタンユニオンで働いていたときに、電気を用いた悪ふざけを同僚に試して、その反応を見ようとした。「水のはいったバケツを電池に接続し、飲んだ人が電気ショックを受けるようにした。いたずらに激怒した仲間の技手から重いガラス絶縁体を投げつけられ、あやうく頭に命中するところだった」(40)。いたずらされた同僚の怒りの度合いからみても、Edison の行動は信じられないものであり、Edison が非人間的な行動をとることに躊躇しない人物であったと推測できるであろう。このいたずらは、どこことなく電気が近い将来、人の役に立つものという概念を超えて、人を殺すもの一電気イスーを彷彿とさせる。その点について追うと、本論の主題からそれてしまう気がするが、ここでは特に取り上げないでおくとするが、彼の好奇心には、危険がつきものであったといわざるを得ない。

また、彼の入学した小学校で行われていた教育は、生徒に授業の暗記を求めるもので、Edison の持ち前の好奇心は、教師に高く評価されるどころか、むしろ「教師に陰で『頭が腐っている』と言われ」(16) てしまう始末であった。この点からみると、Sparky にとって居心地の良かった世の中は、Edison にとっては生きづらかったことが想像される。そして、そんな世の中が Edison の発明により、それまでの古い秩序を捨て、Edison にとって居心地のよい世界になっていくことに、彼自身戸惑いなど感じなかったであろう。

また、大人になった Edison から、彼がいつも人類の幸せに寄与している発明家だっ

たとは言えないエピソードがある。それは、彼の名を一躍有名にした「電灯・電力産業」に徐々に他社が参入してきて、激しい競争が起きていたときのこと、彼は、他社との発明競争に勝ち、自分の商品売り込むために、公然と嘘をついたのである。その当時、Edisonの競争相手の一人である、ジョージ・ウェスティングハウスという人物は、Edisonが発明した電力の直流システムに勝る、交流システムを売り込んでいた。これに対し、Edisonは以下のように反発し、ウェスティングハウスの商品を批判した。

エジソンは交流方式への激しい反対運動を展開し、高電圧システムは公害だと訴えた。その危険性を実証するために、一八八八年、独立系のエンジニアながら、やはりウェスティングハウスと敵対するハロルド・P・ブラウンに、ウェストオレンジのダイナモ室で恐ろしい実験をおこなうことを許可している。

交流発電機を使い、ブラウンは犬、猫、牛、馬など、色々な動物を感電死させた。ウェスティングハウスが推進しているのは死を招くシステムだとしめしたいがために。  
(141)

Edisonの輝かしい評判からは、とても想像できないような姿である。こういった事実が、エジソンへの評価に傷をつけるほどのものであるかどうか分からない。しかし、ここで、私があくまで言いたいことは、世間で「人類の発展」だと言われるものが、常に人類に幸福をもたらすものだと無条件に受け入れることは危険だということである。なぜなら、Vonnegutがこの作品を通して見せるように、「科学は万能」と科学を礼賛する世界は、人が努力をする前からその人の価値を決め、その人が自分の人生を歩む自由を奪ってしまうかもしれないのだ。

## [6] Vonnegutの描くフィクション

Vonnegutは、巧みな言葉遣いにより、読者を物語の世界に引き込もうとするが、この作品はなんといってもフィクションである。したがって、我々読者は、Vonnegutが本当にEdisonについて真実を伝えているのかどうかは分からない。しかし、彼の技巧によって、フィクションを読んだはずなのに、どこか現実世界に不安を覚えさせられるのだ。それもそのはず、ページをめくるとそこには、なじみ深い話言葉があちこちにちりばめられ、かつてのアメリカのパイオニア精神を体現するようなキャラクターや、実在したエジソンが登場する。これらが、アメリカ国民にとって、この物語を親しみやすいものになっていると考えられる。

そして、ここに登場する「男」であるが、なぜ名前がないのかとずっと疑問を持ちながら、この作品を読んでいたがやっとその謎が解けた気がする。intelligence analyzerで選別されてしまう世の中では、人間が、あえて名前をつけて区別する必要もないくらい、取るに足りない—どんな種類のオレンジも「オレンジ」と呼ばれるような—存在になってしまうということをVonnegutはほのめかしているのではないだろうか。この様に、読者にいろんな疑問を頭に浮かびあがらせ、考える機会を与え、物語の中に没入させるた



めに、Vonnegut は書き方にこだわった。

## 注

(1) Vonnegut が指す General Electric 社（以下 GE）とは、General Electric's Schenectady Works のことである。Charles J. Shields によると、GE は当時、30000 人の社員が、600 エーカーの敷地にある 240 の建物の中で働いており、世界で類をみない規模で、工学や科学技術の発達に貢献している企業で、“House of Magic（魔法の納屋）”というニックネームを持っていた。また、Vonnegut の兄も科学者として GE で働いていたが、それだけが Vonnegut の GE 入社を決め手であったというわけではない。Vonnegut は GE で働く以前に、Chicago's City News でレポーターとして働いており、その経験を買われ、General Electric's Advertising News Sales Promotion Group で働くこととなった。この GE での経験が、後の彼の作風へ大きな影響を与えているので、彼がどのように GE という会社を見つめていたかについて、少し視点を移すことにする。

初めこそ Vonnegut は、GE で自分の周囲にあるものを眺め、自分が GE の社員であることを誇りに思い、現代生活の基盤が GE によって改良されていくことを楽観的に見ていた。しかし、ある日の出来事が、そんな彼に新たな視野をもたらす。

One day Vonnegut watched a milling machine cut rotor blades for jet engines in Building 49. Normally, honing turbine blades was an expensive and painstakingly precise series of steps performed by a master machinist. But that day no machinist was involved at all. A computer-operated machine imitated every motion of a human being. The engineers told Vonnegut—a little guiltily, he thought—that the day was coming when “little boxes and punched cards” would run all sorts of machines<sup>99</sup>. It was as if they were aware of betraying their own kind. (102)

49 号棟で、製粉機がジェットエンジンを動かすために回転刃を切断するのをある日、Vonnegut は見た。通常、尖ったタービンの刃は高価なので、優れた機械運転者によって、骨の折れるような正確な操作が行われていた。しかし、その日、その作業には全く機械運転者が関わっていなかった。コンピューターで操作されている機械は、人間の動作をすべて真似ていた。エンジニア達は、Vonnegut に後ろめたいような顔をして、「小さな箱や制御盤が、あらゆるすべての機械を動かす時が来つつある」と言った。それは、まるで彼ら自身が、自分たちの仲間を裏切っていることに気づいているようだった。（筆者試訳）

「機械が、人の介入なしに機械を操作すること」について、Vonnegut は否定的ではない。しかし、“it was too bad for the human beings who got their dignity from their jobs.”(103)（自分たちの仕事に自尊心を持っていた人にとっては、とても良くないことだ。（筆者試訳）と、彼は考えていた。Vonnegut は、人類と科学技術の競い合いが行われている GE を目の当りにし、決して GE（または科学技術礼賛の姿勢）が、人類に幸福をもた

らすと断言できないと思うようになり、これが SF の色調を帯びた彼の最初の作品を生み出すきっかけとなった。彼は、自分の作風が SF に定まったことについて、“since the General Electric Company was science fiction”(103) (なぜなら、General Electric 社が、空想科学小説『そのものだった』からだ。(筆者試訳))と、述べている。

また、偶然か意図的なものかは分からないが、この作品に登場するエジソンは Vonnegut が働いていた GE と無関係な存在ではない。『エジソン』の中では、GE の創立の過程が以下のように書かれている。

一八八九年、ヘンリー・ヴィラードと J・P・モルガンをはじめとする金融資本家の支援者たちが、エジソン・エレクトリック・ライト社と、ランプ工場や機械製作所といったエジソンの各製造会社を整理統合し、エジソン・ゼネラル・エレクトリックを設立する。三年後、ヴィラードとモルガンは同社と小企業のトムソン・ヒューストン社を合併し、ゼネラル・エレクトリック (GE) を創立、エジソンの名は全面的に社名からはずされてしまった。(142)

つまり、GE の前身は、エジソン・エレクトリック・ライト社であり、Vonnegut の描く、エジソンがもたらそうとする人類にとっての不幸な未来は、GE がもたらす未来を示すメタファーとして、使われているとも考えられる。

(2) Charles A. Lindbergh は、1927 年、一人で飛行機に乗って大西洋を横断し、アメリカのヒーローとなった人物である。CharlesLindbergh.com によれば、太平洋横断の十数年後、ナチ政府から招待を受け、ベルリンにいるアメリカ陸軍航空隊のスパイであるトルーマン・スミスに付き添われながら、彼はベルリンを訪問する。すると、そこで、量的にも質的にも彼の理解の範疇を超える数々の武器を目の当たりにした Lindbergh は、アメリカ政府がいかに国民をだましてきたかを知る。その後、第二次世界大戦に参加する前に、アメリカ軍から脱退し、彼は行政やアメリカ国民から静かに離れ、当時最も力のあったアメリカの非介入グループ (戦争においてアメリカに中立の立場を維持するよう求める運動をした) に属す。しかし、ラジオ放送で、Lindbergh がアメリカの連合国軍への支援に対する反対を呼び掛けたことが Franklin Delano Roosevelt の反感を買い、Lindbergh はアメリカへの忠誠心がないと非難され、空軍の大佐の地位を退くことになる。それに対し、彼を崇拜していた人々はもはや彼に同情しなかった。後にパールハーバーでの攻撃を境に、気持ちを動かされ、Lindbergh は、再度アメリカのために軍に入ろうとするが、断られる。

(3) Cornell 大学二年生のとき、*Cornell Daily Sun* の中で “Well All Right” というコラムを担当していた Vonnegut は、当時戦争に参加しないという理由でバッシングを受けたかつてのヒーロー、Charles A. Lindbergh について “We Chase a Lone Eagle and End Up on the Wrong Side of the Fence” という記事を書いた。その抜粋が次の文章である。

Charles A. Lindbergh has had the courage at least to present the conservative side of

a titanic problem, grant him that. That United States is a democracy, that's what they say we'll be fighting for. What a prize monument to that ideal is a cry to smother Lindy. Weighing such inconsequential items as economic failure and simultaneous collapse of the American Standard of Living ( looks good capitalized—it'll be fine for chuckles in a decade), and outrageous bloodshed of his countrymen, the young ones, is virtual treason to the Stars and Stripes—long may it wave. (Klinkowitz & Somer 53)

Charles A. Lindbergh は、少なくともタイタニック問題に関して保守的な立場を表す勇氣は持ち続けたし、私はそう認める。アメリカ合衆国は民主主義である、ということはつまり、私たちが今後アメリカ合衆国の民主主義のために戦うということである。その理想のために、Lindy (Lindbergh の反戦運動) を黙らせろというスローガンは、なんて英雄的な行為なんだ。経済の失敗、それに伴うアメリカ国民生活水準 (は、一見うまくいっているようだが、それは、10 年後には十分笑いの種になるだろう) の下降、といった瑣末的な事柄や若き同胞がひどく血を流すことを強調することは、アメリカの国旗—これからもずっとはためいているであろう—に対する事実上の背信行為である。(筆者試訳)

この記事、一見 Vonnegut が Lindbergh を批判しているようで、実際は、Lindbergh の反戦運動の理由、そしてアメリカ合衆国の民主主義が、どんな犠牲のもとに成り立っているかを説明している文章なのである。Vonnegut の持ち味である皮肉的なユーモアは、'a titanic problem' という言い回しに表れている。'a titanic problem' とは、1912 年に起こった豪華貨客船タイタニック号沈没事件のことである。畑村創造工学研究所のホームページによれば、当時、不沈と言われ、脚光を浴びていたタイタニック号が沈没した原因は、以下のとおりである。

氷山に衝突したことがこの事故の直接な原因であるが、氷山の衝突にいたった原因としては、2 度にもわたる警告を無視したこと、出航が一カ月遅れたために流水が増えた事、夜間であったために視界が悪く、監視に双眼鏡が使われていなかったことなどがあげられる。また、多くの死者を出した理由としては、救命ボートの数が不足していたこと、すぐに救難信号を発しなかったこと、近くにいたカリフォルニア号が無線を切っていたことや信号灯の意味を理解していなかったことなどである。更に、船体の成分は P と S\* が多く、低温ではもろくなりやすい状態であった。そのために船体が割れ、急速に沈没してしまったと思われる。

絶対に沈まない船と思われていたタイタニック号は、舵を取っていた人達の杜撰さから、当初の評判からは想像もできないくらいの早さで沈んでしまい、多くの乗客を死者と負傷者に変えてしまった。この事実を踏まえた上で、Vonnegut の記事を見ると、'a titanic problem' というキーワードはメタファーの役割をしていると考えられる。つまり、'a titanic problem' は、アメリカが第二次世界大戦に参加したら、アメリカ経済やアメリカの生活基盤が崩壊するだけに被害がとどまらず、多くのアメリカ国民や若い命が奪われるという悲惨な結果がもたらされることを読者に予感させる、Vonnegut

の仕掛けなのである。このように、直接的な言葉で対象を批判することをせず、Vonnegut は、メタファーなどを用いて皮肉的に記事を書くスタイルを独自に確立していた。

\*P と S は元素記号で、P はリン、S は硫黄。

## 引用・参考文献

- Vonnegut, Kurt. "Tom Edison's Shaggy Dog." *American Short Stories of Today*. Ed. Esmor Jones. England: Penguin Books, 1988. Print.
- Klinkowitz, Jerome., John Somer, ed. *The Vonnegut Statement*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1973. Print.
- Klinkowitz, Jerome. *Kurt Vonnegut's America*. South Carolina: South Carolina UP, 2010. Print.
- Karl, Frederick R. *American Fiction, 1940-1980: A Comprehensive History and Critical Evaluation*. New York: Harper & Row Publishers, Inc., 1985. Print.
- Shields, Charles J. *And so It Goes Kurt Vonnegut: A Life*. New York: Henry Holt and Company, 2011. Print.
- "School Board Removes Two Books from School." [UPL.com](http://UPL.com). 26 July 2011. web. 14 November 2011.
- Ranfranz, Patrick. "Charles Lindbergh and the 475th Fighter Group." *Charles Lindbergh an American Aviator*. CharlesLindbergh. com, n.d. Web. 22 May. 2012.
- Hamadani Takami, Masayuki Nakao. "Titanic Go Chinbotu Jiko [The Sinking of Titanic]." *Hatamura Institute for the Advancement of Technology*. Hatamura Institute for the Advancement of Technology, n.d. Web. 24 July. 2012.
- カート・ヴォネガット (浅倉久志訳) 『死よりも悪い運命』 (早川書房、2008年)
- カート・ヴォネガット (飛田茂雄訳) 『パームサンデー—自伝的コラージュ』 (早川書房、2009年)
- オーエン・ギンガリッチ、ジーン・アデア (近藤隆文訳) 『エジソン』 (大月書店、2009年)